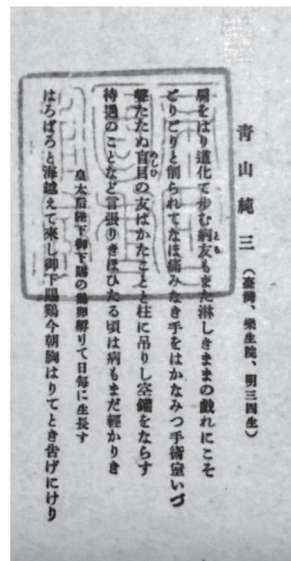


## 『療養秀歌三千集』を読む

星名宏修

はじめに

肩をはり道化て歩む病友もまた淋しきままの戯れにこそ  
 ごりごりと削られてなほ痛みなき手をはかなみつ手術室いづ  
 聲たたぬ盲目の友はかたことと柱に吊りし空鐘をならす  
 待遇のことなど言張りきほひたる頃は病もまだ軽かりき  
 皇太后陛下御下賜の鶏卵孵りて日毎に生長す  
 はらばろと海越えて来し御下賜鶏今朝胸はりてとき告げにけり<sup>1)</sup>



1940年12月に東京で刊行された『療養秀歌三千集』の巻頭におかれた短歌である。青山純三という作者の名前の下に「(台湾、樂生院、明三四生)」と記されている。樂生院とは1930年12月に台湾総督府が開設した癩<sup>2)</sup>療養所の名前だ。明治34(1901)年生まれの青山は40歳にもなっていないが、病気はすでに悪化していたのだろうか。癩は進行すると末梢神経が麻痺するために、化膿した手足を切断しても痛みを感じなくなってしまう。2首目の短歌はそうした悲しみを詠んだものだ。

歌集の選者は内田守人(1900-82、本名は内田守)。当時は国立の癩療養所長島愛生園に勤務する医者であり、患者に短歌の指導を行った歌人としても知られる。1939年に改造社が出版した明石海人(1901-39)の歌集『白描』はベストセラーになったが、明石も内田に短歌を学んだ癩者であった。

『療養秀歌三千集』(以下、『三千集』と略記)に収録されたのは、癩や結核などの「宿病に直面して怯まざる逞ましき人間性を表現したる歌」<sup>3)</sup>である。結核予防団体の白十字会を率いる村島帰之の

依頼により、同会の機関誌『白十字』に闘病短歌を連載するなかで、内田は「療養短歌」を提唱するようになっていた。

この本に収録された短歌は「三千集」どころか 3800 首を越える。『白十字』の後継誌『療養知識』で作品を募集したところ、応募者は 400 名を越え、集まった歌は 2 万首にのぼったという。台湾を含む全国各地から寄せられた短歌を選別したうえで、「(正岡)子規、(長塚)節以下明治以来の有名な故人の病患歌の秀作を全部収録し、又現存歌人の先輩中からも白秋先生以下数氏の力詠を借用」<sup>4)</sup>して刊行されたのが『三千集』である。

ここには、青山純三のほかにも 4 人の楽生院の入所者(梅田秀雄、小崎治子、佐久間南山、武田史郎)の短歌が収められている。植民地の療養所に隔離された癩者の作品がはじめて内地の読者に届けられたのだ。本論は楽生院入所者の「癩短歌」を中心に『三千集』という短歌集を検討するものである。

## 1. 楽生院の成立と皇太后の「御恩」

1930 年 12 月、台湾総督府は癩療養所の楽生院を台北州新莊郡に開設<sup>5)</sup>。当初の入所者は内地人 4 人、本島人 2 人だった<sup>6)</sup>。

設立時の収容定員はわずかに 100 人。同年末に総督府警務局が実施した調査では、全島で 1600 人を超える患者が想定されており、定員の少なさは否めない。しかし内地と異なる法体系のもとにおかれていた台湾では、「主トシテ浮浪徘徊シテ居ル者デ病毒ヲ散蔓シ、風俗上ニモ甚ダ宜シカラヌ」患者の収容を目的とした「癩予防ニ関スル件」(1909 年施行)すら適用されていなかった。「法律なきハンセン病療養所の運営は、台湾総督府立だからこそ可能」だったと芹澤良子は述べている<sup>7)</sup>。

患者を隔離収容する権限を総督府が手に入れたのは、1934 年 10 月に勅令によって台湾に「癩予防法」が施行されてからである。その 4 年前の 1930 年 10 月、浜口雄幸内閣はすべての癩者の隔離収容を前提とする「二十年根絶計画」を策定し、翌年 3 月に「癩予防法」を成立させた。この法律によってすべての患者の収容が合法化された。地域社会からあらゆる患者を療養所に隔離する「無癩県運動」は、台湾にも「無癩州運動」として波及する。

青山純三の 5 首目の短歌が「皇太后陛下御下賜の鶏卵」を詠んでいるように、近代日本の癩病政策の遂行には貞明皇太后が大きな役割を果たした。無癩県運動の中核を担った財団法人癩予防協会も、皇太后が「下賜」した「御手許金」を基金として 1931 年 3 月に設立された団体である。1932 年以後は皇太后の誕生日の 6 月 25 日が「癩予防デー」となった。

皇太后が 1932 年 11 月 10 日に詠んだ「癩患者を慰めて」という短歌(「つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて」)は、「癩患者」に至高の憐れみをかけた歌として、隔離政策施政者たちに熱烈に歓迎された。各療養所には「癩予防協会」を通じて御歌の額面が下賜され、全生病院では、それを称えた「皇太后陛下御坤徳記念碑」が建設された<sup>8)</sup>。楽生院も 1933 年 9 月に「御歌写扁額ヲ拝受」し、38 年 9 月には「御歌碑除幕式」<sup>9)</sup>を実施している。皇太后の「御恩」を旗印として推進された無癩州運動の結果、楽生院の入所定員は 1939 年には 700 人まで増加した。実際の入所者は 43 年の 653 人がピークである<sup>10)</sup>。

## 2. 「感傷主義」と療養所の「癩短歌」

戦後にプロミンなどの特効薬が開発されるまで、癩は治らない病気と考えられていた。長島愛生園の医師小川正子の手記を原作とした『小島の春』は1940年に大ヒットした映画だが、これを観た太田正雄（東京帝国大学医学部皮膚科の医師で木下杢太郎のペンネームをもつ文学者でもある）は、「癩は不治の病であらうか。それは実際今まではさうであった。然し今までは、此病を医療によって治癒せしむべき十分の努力が盡されて居たとは謂へないのである。殊に我国に於ては、殆ど其方向に考慮が費されて居なかつたと謂って可い。そして早くも不治、不可治とあきらめてしまつて居る。従つて患者の間にも、それを看護する医師の間にも、之を管理する有司の間にも感傷主義は溢れ漲つてゐる」<sup>11)</sup> という感想を残している。

太田正雄の指摘した「感傷主義」を手がかりに、近代日本の癩病政策を文学作品に表現された患者像とあわせて批判したのが大西巨人である。多くの作品に描かれた「癩への業病・天刑病祝であり、癩患者への「生きる意味を喪失した社会外人間」祝であり、癩問題一般なかんずく癩家族問題の社会的性格への無視」の背景には「感傷主義」が存在することを指摘したうえで、「これらの諸作家は、各人の主観において必ずしも癩患者を嫌悪し軽蔑しているのではない。彼らは、むしろ主観的には患者にたいして微温的な感傷的な「善意」と「同情」とをさえ抱いているのである。彼らに共通する業病・天刑病呼ばわりも「社会外人間」祝も、おそらくその「善意」と「同情」とから出て来ているのであろう。(中略) この種の感傷主義、この種の善意と同情とが、「地獄への道」を舗装したのである」<sup>12)</sup> と述べている。

近代日本において「癩病の撲滅とは、病気を癒やすことで患者を救うことではなく、患者を撲滅することで国家と社会とを病気の呪いから癒やすこと」であり、「個々の患者にとって癩病が不治の病であったとしても、そうした患者のすべてが絶滅してくれさえすれば、国家にとっては癩病の治癒を意味」<sup>13)</sup> した。このような「血腥いまでに非人間的」<sup>14)</sup> な考えの背景には、癩を「不治、不可治」の病とみなした「感傷主義」が横たわっているのである。

浜口内閣の「二十年根絶計画」をふまえ、1935年に台湾癩予防協会が作成した『台湾の癩根絶策に就て』は、収容患者の「発病より死亡迄の年数」を次のように数値化している。

癩療養所収容中の癩患者の、発病より死亡迄の年数を統計的に観るに、発病後一年以内に死亡するものは僅か〇・六%に過ぎざるも、経過年数と共に死亡率も増加し、発病後六年に至れば七・五%となり、第九年には殆んど一〇%を示し、其後は逡減するも而かも第十五年迄は相当高率を示し、第二十五年迄には殆んど全部(九五%)死亡するものなり。……尚ほ癩の発病より療養所に収容される迄の経過年数は、内地各療養所及楽生院等の統計に拠れば、平均五ヶ年と観るべく、即ち概ね発病第六年に収容さるゝものと見做すを得べし<sup>15)</sup>。

「絶滅」を期待された癩者たちが、過酷な隔離に耐えられるよう適切な慰安を与えることが癩政策を遂行するうえで大きな課題となった。そこで注目されたのが芸術や文学であり、実際に患者への短歌創作の指導にあたったのが『三千集』の編者内田守人だった。

1900年に熊本で生まれた内田守(守人は筆名)<sup>16)</sup> は、熊本医学専門学校を卒業後、1924年から九州療養所(現在の菊池恵楓園)の医局員として働きはじめる。この年に九州療養所では短歌会が結成

され、内田が指導を行うことになった。謄写刷りの『檜の影』は「ハンセン病患者の短歌や俳句が療養施設の外部の者たちの眼に触れる機会を提供し」<sup>17)</sup>た。内田守を「ハンセン病短歌のプロデューサー」と評価する松岡秀明は、その一方で彼の思考にひそむパターンリズムを指摘している。「医療従事者が患者の利益のためとして、患者に干渉してその自由や権利を制限したり患者に何らかの行動を勧めることを意味する。／内田が患者たちに短歌を詠むことを勧め、それを世に出そうとしたのは、患者たちを世間の人々に知ってほしいというパターンリズムに基づいている」<sup>18)</sup> というのだ。

ここでは内田守が台湾の『社会事業の友』に寄せた「癩患者と文芸生活」の一節を引用しよう。

私が癩患者の文芸運動を高唱するに二つの理由がある。一つは患者それ自身が文芸によつて或程度まで社会的に進出し精神的甦生を企図し得ると云ふこと、又一つには我々の如き癩予防事業に従事しつゝある者が、患者の生活を社会に紹介し又患者の心理状態を伝えるには芸術的響の高い彼等の文芸活動によることが最も有効であることである。(中略)

尚文芸方面の実際問題に当つて一言して置きたいのは、御承知の様に目下の療養所に収容されてゐる癩患者は比較的教育程度の低きもの多く、余り素養を要しない短歌俳句等の短詩形より文芸の入門をなすがよいと思ふ。又病人であり相当の肉体的苦痛を持つてゐる者であれば比較的体力を要しない短い形式の文芸を選んだ方が得策である。(中略) 又短歌と俳句は同じ短詩形にしても、前者は主情的であり字数も多いので後者に比して患者の心境を表現するには便利である様である<sup>19)</sup>。

特効薬のない時代に「癩予防事業に従事」した内田は、患者の「精神的甦生」を心にかけていた。大西巨人に倣えば「善意と同情」である。短歌は「患者の生活を社会に紹介し又患者の心理状態を伝える」材料であり、「比較的教育程度の低き」癩者にも「心境を表現するには便利」なものだと内田は考えていた。

しかし内田の動機が「感傷主義」にもとづくものであったにせよ、先の見えない療養所生活を強いられた癩者にとって、短歌の創作が心の支えになったことは否定できないだろう。『三千集』に収録された「生くることの物鬱ものうきときはためはずものうき歌を詠めばなぐさむ」(岸曙山、岡山、光明園、明三四生、104頁)や「歌を詠む術をし知らぬそのかみは病に泣く日の多かりしかな」(水原隆、熊本、九州療養所、昭九、三六歳没、308頁)<sup>20)</sup>などの短歌からは、「歌を詠」むことの切実な意味が伝わってくる。

### 3. 植民地台湾の「癩短歌」

近代日本の「癩文学」で最も著名な文学者は、全生病院(1909年創立、現在の国立療養所多磨全生園)に入所した北条民雄(1914-37)だろう。1933年に発病した北条は、翌年5月に全生病院に入院。35年に執筆した小説「間木老人」が川端康成に注目された。代表作「いのちの初夜」が『文学界』(1936年2月)に掲載されたのも、川端の強力な推薦があった。また1937年から38年にかけて改造社が刊行した全11巻の『新万葉集』には、明石海人をはじめとした全国の療養所入所者の「癩短歌」が収録されている。内田守人の指導を受けた明石の短歌は1939年に改造社から『白描』として出版され、

大きな話題となったことはすでに述べた。

北条民雄や明石海人の活躍の「前史」として、全生病院では1919年に文芸雑誌『山桜』が創刊され、入所者たちの発表の場となっていた。長期にわたって『山桜』の編集長をつとめた麓花冷は「法規が改正されて自宅収容が許されず、有産階級の患者が多くなるに従ひ、知識人も殖え、療養所内の生活は、文学のみならず各方面に著しく向上を示したのである。その影響によつて文学方面には詩と散文々学といふ自意識が興つた」<sup>21)</sup>と述べている。北条や明石の作品が注目されるようになった背景には、30年代前半に本格化した強制隔離政策があったのである。

それでは台湾はどうだったか。すでに述べたように、楽生院の設立は1930年12月。強制隔離を可能にした「癩予防法」が勅令によって施行されたのは1934年10月である。そのおよそ半年前の1934年5月頃、楽生院慰安会の機関誌『万寿果』が創刊<sup>22)</sup>された。会則で「会長ハ台湾総督府警務局長ヲ推シ其ノ他ハ会長之ヲ命免ス」<sup>23)</sup>ることを明記した同会は、「患者を精神的に慰撫善導して可及的娯樂を与え、そして不知不識の裡に療養生活に興味を生ぜしめて脱柵逃走等を防止」<sup>24)</sup>することを「事業方針」に掲げている。警務局と一体となり、総督府当局の癩病政策を実行にうつした団体といえる。現存する『万寿果』は1935年4月の「皇太后陛下御仁慈感激記念号」が最も古い。貞明皇太后が台湾癩予防協会に2万円を「下賜」したことへの「感激」が誌面をおおっている。

ここまでの経緯を整理しよう。日本内地では1909年に浮浪患者の患者を目的とした「癩予防ニ関スル件」が施行され、全生病院など5つの療養所がつけられた。1919年に全生病院では文芸誌『山桜』が創刊される。あらゆる患者の強制隔離を目的とした「癩予防法」が1931年に成立した後、療養所に「有産階級」や知識人が増えたことで文学活動が活発になっていった。

癩療養所の建設が遅れた台湾では、「癩予防法」の施行と『万寿果』の刊行がほぼ同じ時期のことだった。北条民雄らが登場するまでに多彩な文学創作の「前史」があった内地の療養所とは異なり、楽生院にはそうしたものは存在しなかった。『万寿果』の誌面の大部分を「国語」（日本語）が占めたことも、入所者の9割を占める本島人を遠ざけることになった<sup>25)</sup>。

第3巻第3号（1937年1月）からは柴山武矩が『万寿果』短歌欄の選者となる。1929年に台湾に渡った柴山は、台湾社会事業協会の機関誌『社会事業の友』の編集に従事した。彼が編集した第27号（1931年2月）の「癩問題特輯号」は「日本全国斯業の雑誌界に於て始めての企て」であり、「日本の癩問題の全貌が、あの一冊によつて、大体余すことなく掴み得」<sup>26)</sup>るものだという。内田守人の「癩患者と文芸生活」もこの特輯号に掲載されたものだ。内田と同じように柴山武矩も、短歌が「療養所に隔離されたまゝ、余生を終らんとする患者」<sup>27)</sup>や「我が国から癩を失くす為に、救癩戦線の第一線にあつて、お国の犠牲となる戦士」<sup>28)</sup>の慰安になることを期待しているが、彼らが「お国の犠牲となる」ことは揺るがぬ前提だった。

柴山の観察によれば、楽生院の入所者の9割を占める「本島人患者は、歌を詠むまで国語が至ら」<sup>29)</sup>ない。一方で「内地人は、僅々四十名足らずである。その中歌を作る人々は十二三名」<sup>30)</sup>にすぎなかった。短歌は『万寿果』のなかで比較的多くの誌面をしめていたものの、詠み手の数はごくわずかだったことがわかる。こうした制約はあるものの、短歌を詠む／読みリテラシーを持ちえた少数の入所者には、短歌創作は「心境を表現するには便利」（内田守人）な手段となった<sup>31)</sup>。『療養秀歌三千集』に作品が掲載された5人は数少ない常連の短歌創作者だったのである。

#### 4. 『療養秀歌三千集』の編纂

1939年5月、白十字会の雑誌『療養知識』に「『療養秀歌三千集』の編纂に就て」という広告が掲載された。白十字会は結核患者の救済を目的として1911年に設立された財団法人である。機関誌『白十字』は1938年9月号から『療養知識』と改題した。

少々長くなるが広告の全文と募集規定を引用しよう。

明治歌壇の先覚者正岡子規以来、疾患短歌の勃興は実に眼覚ましきものがありまして、結核及癩その他の慢性疾患に悩む人々が、其の病床生活の中にも生き甲斐を感じて、之を短歌に表現する事は、病者の心を開放し其の闘病心を根強くするものでありますが、又一般社会人との精神的交流の絆となるものであります。

結核療養上の啓蒙と、療養者の精神的慰安とを目的とする我が白十字会は、機関誌「療養知識」（旧名白十字）を発行して、三十年の久しきに亘り聊か病者文芸の発達にも微力を尽して来たのであります。而して本誌は昨年来、国立癩療養所長島愛生園医官医学博士内田守人先生に委嘱して、毎号「療養短歌読本」を連載しつつあります。先生は歌誌「水甕」の同人であり、癩及結核を病む療養歌人の实际的指導者として十数年の経験を有して居られますので、其の短歌読本は懇切丁寧を極め初学者の間に絶讃を博しつつあります。本稿はいづれ単行本として病友の枕頭に送る予定ですが、本誌は更に其の姉妹篇として

##### 「療養秀歌三千集」

の編纂を乞ひ、明治大正昭和三代に亘る疾患短歌の総集成を企図しつつあります。多忙なる先生ではありますが、此の画期的な事業を快諾せられ、先生独特の医学的分類法によつて編纂せらるる筈であります。

幸に本会の意の有る処を諒とせられ、有名無名を問はず、療養歌人諸兄姉の御賛同を得て、後世に誇り得るものたらしめたいと祈念するものであります。

昭和十四年四月四日

東京市神田区小川町二丁目一番地

社団法人白十字会内

「療養知識」編纂部

##### 原稿募集規定

- 一、募集歌は叙情叙景を問はず、総て疾患的背景あるものに限る。
- 二、歌数は三〇－五〇とし、可及的発表済のものたること。
- 三、既に故人となられたる人の作品は、其の歌集及遺詠中より、是非御知友の手にて抄録して御送附を乞ふ。
- 四、用紙は二十行原稿用紙たること。
- 五、姓名は明記し振仮名を附すること、匿名は自由なれども、末尾に本名及現住所を明記すること。
- 六、住所、年齢、（故人は死亡の年齢及年号）歌壇経歴等簡單なる略歴を附すること。
- 七、原稿締切は六月末日、封筒に「三千集原稿」と明記し、手紙を同封せざること<sup>32)</sup>。

ここでは下線を引いた箇所に注目したい。「結核及癩その他の慢性疾患に悩む人々」にとって、短歌の創作は「生き甲斐」となり「病者の心を開放し其の闘病心を根強くする」ばかりか、「一般社会人との精神的交流の絆」にもなるという。こうした認識は、内田守が「癩患者と文芸生活」で述べた「患者それ自身が文芸によつて或程度まで社会的に進出し精神的甦生を企図し得ると云ふ」考えとかわらない。松岡秀明のいう「パターンリズム」は『三千集』の編纂にも通底しているのだ。

募集要項は投稿に際して本名と現住所を明記することを求めている。癩を病む者にとっては心理的な負担となったと思われるが、広告の掲載から原稿締切までわずか2ヶ月弱にもかかわらず、400名を越える応募者の作品が編集部へ寄せられたことは「はじめに」で紹介したとおりだ。

『三千集』のなかで癩療養所を現住所として記しているものは200人。この本には562人の短歌が収録されているので、その比率は35.6%。残りの6割以上は結核患者がしめていることになる。1934年以後、結核は日本における死亡原因の一位であり、『三千集』が刊行された1940年の死者は153154人にもなる<sup>33)</sup>。若くして命を落とす患者も多く、22歳で夭折した池田貞子の「どうかして治らぬものかと人は言ふうるさいなあと私は聞いている」「わが病めばやさしくなれる妹と真白き皿に苺をたべる」(滋賀、昭四、二二歳没、新緑、26頁)や、大野虎治の「諦らめよあきらめよと母がいふこゑを血を喀きながら我はうべなふ」(埼玉、昭六、二四歳没、アララギ、73頁)などの歌が収録されている。

『療養知識』が楽生院にも毎号5部ずつ送られていたことは、『万寿果』の「感謝欄」から確認できる。『三千集』に短歌を寄稿した台湾の入所者たちは、日頃から『療養知識』に目を通し、内田守の「療養短歌読本」から数々の優れた病床歌を学んでいたのだろう。

## 5. 『療養秀歌三千集』を読む

ここでは『三千集』に収録された楽生院入所者の短歌を、他の療養所の作品とともに検討する。なお論述の便宜のために、これらの短歌には整理番号をつけた。

○青山純三(台湾、楽生院、明三四生、1頁)

- ①肩をはり道化て歩む病友(とも)もまた淋しきままの戯れにこそ
- ②ごりごりと削られてなほ痛みなき手をはかなみつ手術室いづ
- ③聲たたぬ盲目の友はかたことと柱に吊りし空鐘をならす
- ④待遇のことなど言張りきほひたる頃は病もまだ軽かりき  
皇太后陛下御下賜の鶏卵孵りて日毎に生長す
- ⑤はろばろと海越えて来し御下賜鶏今朝胸はりてとき告げにけり

○梅田秀雄(台湾、楽生院、64頁)

- ⑥何か知ら話し掛けくる病む友の言葉知らねばただ笑みてゐき(本島人)
- ⑦植ゑ行きし記念の松は芽ぐめども故郷に帰りし病友音信せず

○小崎治子(台湾、楽生院、万寿果、128頁)

- ⑧人を避けこの昼過ぎを我一人炊事場に来て文書きにけり
- ⑨発車間際にかけてくれし叔母の姿今も我が目にありありとみゆ

○佐久間南山(台湾、楽生院、明二二生、万寿果、139頁)

- ⑩おろそかにすまじき命今日もまた故郷の子等の手紙来にけり

⑪逢ひに来し三人の子等をそれぞれに打ち見たるかも涙のなかに

⑫芭蕉<sup>バナナ</sup>の皮まがれる指に剥ぎかねつ口そへて剥ぐ我となりたり

○武田史郎（台湾、楽生院、明四一生、短歌研究、197頁）

⑬疵癒えて心おきなく湯にひたる日はも我には来ることなけむ

⑭わづかにも残らふ私の軟き膚撫で飽かずるて泣きたくなりぬ

楽生院の5人の短歌をあわせて14首。そのなかで悪化する自身の病状を詠んだものが5首（②④⑬⑭）にのぼる。「此病を医療によって治癒せしむべき十分の努力が盡されて居たとは謂へない」（太田正雄）当時の治療は、大風子油の筋肉注射が主なものだったが、その効果については疑問とされている。

青山純三の②は「はじめに」で触れたので繰り返さないが、麻痺の進行した癩者の生活を詠んだ歌を『三千集』から一首だけ紹介しよう。大島療養所に入所していた松本松月の「手の感覚を奪れし身のはかなかり風呂の加減を舌に見につつ」（松本松月、香川、大島療養所、明三三生、藻汐草、298頁）。「手の感覚」が失われた彼は、風呂の温度を舌で確認するという。癩のために視力を奪われる患者は多いが、なかには点字を「舌読」するものもいた。最後まで残るのが舌の感覚だったという。

青山の④は、まだ病気が軽く、当局に待遇改善を訴えることのできた自らの姿を振り返ったもの。蘇月生は「楽生歌壇の人々（一）」で、この頃の青山について次のように書き留めている。「こゝで最近入院した人であるが最も油の乗り切つて居る青山純三君に就いて語りたと思ふ。君には何回も「万寿果」の表紙絵を書いて頂いたものである。眼鏡をかけた理智的なその眼、物事の奥底迄見極めずには置かぬと云ふ如きその眼を見て居ると自分も共に何かに引き入れられそうである。学識はあり、絵画に対する造詣は深し、君など大いに之から何処迄も伸びる人ではあるまいか。只惜しむらくは君もあまり健康に恵まれず、既に重病棟に在つて歌会にも毎会<sup>ママ</sup>出られぬ状態である」<sup>34</sup>。

効果的な治療法もないまま手を切断するまで症状が悪化していた青山は、すでに重病棟に送られていた。なお『三千集』には重病棟を詠んだ石川孝（熊本、九州療養所、昭五、二五歳没、アララギ）の「十中の六人までが死して出る此の病室にうつされにけり」（28頁）のような歌もある。

⑬⑭の作者の武田史郎は「在院年限最も永く楽生院創設以来の」入所者で、数多くの短歌や小説を『万寿果』に発表した書き手である。明治41（1908）年生まれ。『三千集』刊行時にはまだ32歳だが入院歴は10年に及ぶ。彼もすでに重病棟に入っていたようだ。「転室の日は近づけりわれ遂に重病棟に転されむとす」や「現世のきわみに立ちし心地して現身ひとり今日も病み臥す」（『万寿果』第5巻第2号、1938年6月）などの凄絶な短歌を詠んでいる。

⑬は「心おきなく湯にひたる」というささやかな願いすら望むべくもない病状を見すえた歌だ。⑭の「わづかにも残らふ私の軟き膚」という表現からは、身体の大部分が癩菌に冒された重篤な状況が伝わってくる。

⑫の作者である佐久間南山は、若い患者が多くを占める楽生院で、「吾々の兄さんお父さん格」<sup>35</sup>とみなされていた。明治22（1889）年生まれなので、すでに51歳になっている。『万寿果』には「退院の日を願ひつゝこの年もたゞにむなしき日のみすごしつ」（第5巻第1号、1938年2月）や「うつしよにむなく五十路すぎにけり薬の効かぬ病まもりて」（第6巻第1号1939年4月）など、療養所に隔離されたまま老いていく虚しさを詠んだ短歌がある。

しかし『三千集』に収められた⑩や⑪は、こうした諦念とはやや異なる印象を残す。田中光雄の



「家出でて十一年かうかららの一人も逢ひに来ることもなし」（熊本、回春病院、大二生、アララギ、205頁）のように、癩を発病すると家族からも断絶され、音信すらとだえることが稀ではなかった時代に、佐久間のもとには手紙ばかりか3人の子どもが「逢ひに来」るのである。「今日もまた」(⑩)というのだから、手紙は頻繁に届いたのだろう。⑪の「涙のなかに」という表現には、子どもの成長への喜びだけでなく、今後も隔離され続ける悲しみも込められているように思う。この歌の数年後、彼の息子は中国大陸の戦場に向かうことになった。「同胞の血もて戦ふ大陸に吾子もい征くか心勢ふ」「秘めて来し病ひかなしけど人目さけ吾子見送りたいし征でたつ吾子を」という短歌を『万寿果』（第9巻第1号、1942年5月）に残している。

自らの病状を詠んだ歌に次いで多いのは、病友を題材にした4首(①③⑥⑦)である。①のように「病友」は「とも」と読む。なかでも「本島人」という題の⑥は、植民地台湾ならではの作だろう。楽生院の入所者の9割を本島人が占めたことはすでに述べたが、教育を受ける機会にめぐまれなかった彼らの多くは「国語（日本語）」を理解することができなかった。しかし同じ病を「病む友」として、内地人の作者に台湾語で「何か知ら話し掛け」てくる。「友」の言葉が分からない梅田も、相手の好意に「笑み」で応えるのだ。

被植民者の病友を詠った短歌は台湾独自のものである。そうした作品として吉川次郎の「国語をば解せぬ友あはれ指なき手を口にあてつゝさみしくも笑む」（第3巻第3号、1937年1月）や青山純三の「高砂族の病友と起居を偕にして」という題の「舌たらぬながらにかたりつぐ友は蕃山<sup>やま</sup>の生活<sup>たつき</sup>のうつろひをいふ」（『万寿果』第8巻第3号、1941年10月）などが『万寿果』には掲載されている。

青山純三の③は盲目となった病友を詠んだもの。すでに述べたように、癩が進行すると目にも障害が及ぶようになる。内田守人は「戦前の療養所で古い病人の多いところでは三〇%ぐらいの盲人が居た。人間の五感器の中で視力は最も大切なもので、失明、特に大人になってからの中途失明は苦しみが激しいようである。戦盲も大変だが、ハ氏病はすでに世捨人として生きながらえて来た者である。これが、更に失明の苦難を与えられては、全く生への希望を失い、再度の自殺を考えるのもむりはない」<sup>36)</sup>という。

『三千集』にも失明をテーマとした短歌が収録されている。ここでは2首紹介しよう。「現身の視力かへらずこの春は花さへ我にそむく思ひす」（島田尺草、熊本、九州療養所、昭一三、三五歳没、水甕、152頁）、「癩病の宣告受けし時よりも眼盲ゆるが身にしみるなり」（原田稔、東京、全生病院、大一生、あしかび、260頁）。

③の盲目となった「友」は、咽頭も癩菌に冒されたためか声すら出せなくなっている。目の見えない患者が柱に吊した空き缶をならして人を呼ぶのは療養所の日常的な風景だが、そこには「生への希望を失」った癩者の苦しみが表現されているのだ。

梅田秀雄の⑦も気になる歌である。楽生院『昭和十五年年報』によれば、1930年の開院から1940年12月末までに「病毒伝播ノ虞ナキモトノトシテ退所セシ」<sup>37)</sup>内地人は21人いたことがわかる。内地人収容者の延べ数は102人なので、20%強になる。⑦の「病友」も「病毒伝播ノ虞ナキモトノトシテ退所」したのだろう。本来なら祝福すべき友のその後を詠んだ短歌である。

ところで楽生院院長の上川豊は「内台癩病観の異同」のなかで、内地では「いつまでも頑固に此の迷信（\*癩の遺伝説を指す、引用者）に凝り固つて居る。そして本病者を侮蔑し、その血縁者を擯斥して、特殊劣性の血統人種でゝもあるが如く考へ、交際を断ち、癩者の一門は社会から、忍ぶに堪えない冷視侮蔑を受けてゐる」<sup>38)</sup>と論じている。たとえ「病毒伝播ノ虞ナキモトノ」と認められて

も、「癩」を患ったという過去を消すことはできない。本人どころか、その「一門」まで「忍ぶに堪えない冷視侮蔑を受けてゐる」故郷に、回復者である梅田の「病友」は本当に帰ることができたのだろうか。もし故郷に戻ったとしても、自らの病歴はひた隠しにしなければならなかつたらう。丘とみ子の「病める身は悲しきものか夢にみる吾が家の門を入りかねにつつ」（群馬、栗生楽泉園、昭一、二五歳没、いぶき、73頁）のように、ひとたび癩を病むと「吾が家の門」は遙か遠いものになってしまうのである。

「皇太后陛下御下賜の鶏卵孵りて日毎に生長す」と題された青山純三の⑤の短歌は、文字通り貞明皇太后の「恩」を詠んだもの。1932年の「癩患者を慰めて」をはじめとして、皇太后の「御恩」は癩根絶策の動力となっていた。短歌のなかにある「御下賜の鶏」とは、1935年1月に上川豊が「皇太后陛下ニ单独拝謁ノ光荣ヲ賜リ台湾関係ノ救癩事業ニ就テ言上シマタ有リ難キ御下問ノ御言葉ヲ拝シ且ツ御賜饌御菓子折、鶉卵、鶏卵等数々ノ優渥ナル御下賜品ヲ拝受」<sup>39)</sup>したものを指す。同じ頃、『万寿果』にも「お下賜の鶏を」と題する短歌が掲載された。宮崎勝郎の「とざされし胸のうれひも晴れて来ぬ大宮鶏のうたう声きき」や武田史郎の「御恵みの鶏すこやかに生ひ立ちて朝日の庭に真白に輝く」<sup>40)</sup>などである。

『三千集』には皇太后のありがたさを詠んだ癩者の歌が散見する。村上多一郎の「かへり見るはらからさへやなき吾に大御心のおよぶかしこさ」（熊本、九州療養所、明四〇年生、アララギ、318頁）は典型的なものだ。世間から排斥された癩者に「救済の手を差し伸べる」ことで「皇室の恩愛」が鮮明になる構図を、片野真佐子は「落差のパトス」<sup>41)</sup>と表現した。大西巨人が批判した「感傷主義」は「皇室の恩愛」によって大きな影響力を持ちえたのである。

最後に小崎治子の2首（⑧⑨）をみてみよう。小崎治子は『万寿果』の数少ない女性の投稿者であり、戦後も多磨全生園の『山桜』に、「再びは渡る事なき台湾の絵葉書手にして語るも懐かし」<sup>42)</sup>や「儂なみし事もなくなり終戦の台湾偲びぬ吾引揚げし今日」<sup>43)</sup>など台湾の記憶を短歌で表現したことも着目すべき人物である。

台湾で癩に罹患した小崎は、「人の世に出る事を今は許されぬわびしき身をばあきらめむとす」（『万寿果』第5巻第2号、1938年6月）のような「あきらめ」を詠む一方で、故郷とのつながりを担保する手紙をしばしば短歌の題材にしている。「なつかしき故郷の母の手紙にはわが病むことは書かざりにけり」（『万寿果』第4巻第2号、1937年6月）はその一例だ。『三千集』の⑧もそうした歌である。大切な人に宛てた手紙を、ひとけのない炊事場で静かにしたためている姿が目にかぶ。もしかしたら「わが病むことは書かざりにけり」と詠んだように、自らを襲った絶望的な病については触れることなく、台湾で元気で過ごしていると書いているのかもしれない。

小崎治子に限らず、手紙を題材とした短歌は『三千集』に数多く収録されている。療養所に隔離された癩者にとって、手紙は外部とつながる唯一のよすがであった。何首か紹介しよう。

故郷にいだす手紙はかなしくも人にかくれて宛名かくなり<sup>44)</sup>

いまはしき病をやめば公職の兄への便りは住所を書かず<sup>45)</sup>

うとまるる病をもてば手紙さへ名前秘めよと父はのらしぬ<sup>46)</sup>

年に四五度父に出す手紙も病む我は名も筆蹟もかへて出すなり<sup>47)</sup>

吾ありて嫁ぐ日もなく妹が身をしひたげてゐる便り手にあり<sup>48)</sup>

人あらぬ松の樹蔭に身をひそめ故郷の手紙をくりかへし読む<sup>49)</sup>

いずれの歌からも、癩を思い療養所に強制的に隔離されるということが、どのような体験だったのかが伝わってくるだろう。彼らの病を「医療によって治癒せしむべき十分の努力」（太田正雄）をつくすことなく、患者自身の「絶滅」をもって癩問題の「解決」と考えてきたことは本論で述べた通りだ。

「人の世に出る事」を許されなくなった小崎にとって、⑨の叔母のように、かつての肉親との記憶は貴重なものだったはずである。小崎が台湾に向かうため故郷の駅を離れた時の出来事なのだろうか。彼女が「ありありとみ」たのは、駆けつけてくれた叔母だけではなく、その時には健康だったかつての小崎自身の姿でもあっただろう。

### おわりに

2002年から2010年にかけて、皓星社から全10巻の『ハンセン病文学全集』が刊行された。小説や詩だけでなく短歌・俳句・川柳・児童文学に記録・評論などさまざまなジャンルの作品を網羅した画期的な全集である。しかしそこには植民地の作品は含まれていない。楽生院で創作されたさまざまなテキストは、今日にいたるまで内地／日本では読まれることがなく、忘却の彼方にうち捨てられている。そう考えるとわずか14首ではあるにせよ、植民地で詠まれた癩者の短歌が『三千集』によって内地の読者に届けられていたことの意義は大きい。もしかしたらこの短歌集を手にとり、遙か離れた植民地の「療養所に隔離されたまゝ、余生を終らんとする患者」（柴山武矩）たちに思いをめぐらせた読者がいたかもしれない。現実には戻ることが困難な故郷だったが、そうした読者がもしもいたとすれば、青山純三たちも短歌を通じて擬似的な帰還を果たしたといえないだろうか。

### 注

- 1) 内田守人選『療養秀歌三千集』徳安堂書房、1940年12月、1頁。
- 2) 今日では「ハンセン病」と称するが、本論文では引用を除いて「癩」と表記する。戦後に特效薬が出現するまで癩は不治の病気とみなされており、癩問題の「解決」とは強制隔離した患者の「絶滅」によって達成されるものとされた。療養所の医師だけでなく癩者本人にとっても、自らの病は治癒可能な「ハンセン病」ではなく「癩」だったのである。
- 3) 内田守人「巻末記」『療養秀歌三千集』、ページなし。
- 4) 同注3。なお（ ）は引用者による補足である。
- 5) 植民地台湾の癩政策については、星名宏修「植民地台湾の「癩文学」を読む－宮崎勝雄のテキストを中心に」（『日本台湾学会報』第21号、2019年7月）で論じた。
- 6) 「収容患者定員及現在数」『昭和五六年統計年報』台湾総督府楽生院、1933年、7頁。
- 7) 芹澤良子『帝国日本の台湾統治とハンセン病』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文、2012年、194頁。
- 8) 荒井裕樹『隔離の文学－ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス、2011年、173頁。
- 9) 「沿革」『昭和十三年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1939年、3頁、8頁。
- 10) 上川豊「台湾総督府の救癩事業回顧 後編」『レプラ』第21巻第6号、1952年11月、44頁。
- 11) 太田正雄「動画「小島の春」」『日本医事新報』第935号、1940年8月10日。引用は『木下杢太郎全集』第17巻、岩波書店、1982年、190頁より。下線は引用者。
- 12) 大西巨人「ハンセン病問題－その歴史と現実、その文学との関係」『新日本文学』1957年7月号・8月号。引用は大西巨人『俗情との結託』立風書房、1982年、318頁より。
- 13) 澤野雅樹『癩者の生－文明開化の条件としての』青弓社、1994年、88頁。

- 14) 同注 12、308 頁。
- 15) 財団法人台湾癩予防協会『台湾の癩根絶策に就て』財団法人台湾癩予防協会、1935 年、11-12 頁。
- 16) 内田守人については、馬場純二「医官、内田守と文芸活動」(『歴史評論』第 656 号、2004 年 12 月号)を参照した。
- 17) 松岡秀明「光をうたった歌人－新・明石海人論 08」『短歌研究』第 75 巻第 9 号、2018 年 9 月、162 頁。
- 18) 松岡秀明「光をうたった歌人－新・明石海人論 09」『短歌研究』第 75 巻第 10 号、2018 年 10 月、144 頁。「／」は改行箇所。
- 19) 内田守人「癩患者と文芸生活」『社会事業の友』第 27 号、1931 年 2 月、30-32 頁。下線は引用者。
- 20) 以下、『三千集』からの引用はページを表記することで注に代える。
- 21) 麓花冷「我等の文学」『科学ペン』第 3 巻第 2 号、1938 年 3 月、99 頁。下線は引用者。
- 22) 創刊号が見つからないため、刊行の時期を正確につきとめることはできない。『近現代日本ハンセン病問題資料集成 補巻 7 台湾におけるハンセン病政策』(不二出版、2005 年)の清水寛・平田勝政による「解説」によった。
- 23) 「台湾総督府楽生院慰安会々則(昭和六年十二月二十六日制定)」、『昭和五、六年統計年報』台湾総督府楽生院、1933 年、37 頁。
- 24) 上川豊「台湾総督府の救癩事業回顧 後編」『レプラ』第 21 巻第 6 号、1952 年 11 月、43 頁。
- 25) 楽生院における本島人の創作に関しては、星名宏修「1930 年代植民地台湾の「癩文学」を読む－雑誌『万寿果』における本島人の作品を中心に」(『台湾文学研究集刊』第 22 期、国立台湾大学台湾文学研究所、2019 年 8 月)を参照のこと。
- 26) 柴山武矩「流れゆく」『社会事業の友』第 120 号、1938 年 11 月、39-40 頁。
- 27) 柴山武矩「楽生院歌人」『社会事業の友』第 104 号、1937 年 7 月、76 頁。
- 28) 柴山武矩「感想」、『日本 MTL』第 83 号、1938 年 2 月、3 頁。
- 29) 同注 27、76 頁。
- 30) 蘇月生「楽生歌壇の人々(一)」『万寿果』第 6 巻第 1 号、1939 年 4 月、25 頁。  
 なお楽生院が刊行した「種族別収容患者現在員(昭和十三年末)」(『昭和十三年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1939 年、14 頁)によれば、1938 年末現在の楽生院の入所者は 628 人。うち内地人は 37 人、本島人が 577 人である。このほかに 2 人の高砂族と 12 人の外国人が収容されていた。  
 同年報の「教育程度別調査表」(29-30 頁)によれば、628 人の入所者のうち「無教育ノモノ」が 363 人(57.8%)で、「多少文字ヲ知レルモノ」の 24 人を合わせると 60%を超える。
- 31) 楽生院の「癩短歌」については、星名宏修「植民地台湾の「癩短歌」を読む－楽生院慰安会『万寿果』を中心に」(『野草』第百号編集委員会編『中国文藝の饗宴－野草第百号』、研文出版、2018 年)で論じた。
- 32) 『療養知識』第 29 巻第 5 号、財団法人白十字会、1939 年 5 月、ページなし。太字は原文のまま。下線は引用者。
- 33) 福田真人『結核の文化史－近代日本における病のイメージ』名古屋大学出版会、1995 年、50 頁。
- 34) 同注 30、27-28 頁。
- 35) 同注 30、26 頁。
- 36) 内田守人『生れざりせば－ハンセン氏病歌人群像』春秋社、1976 年、16 頁。
- 37) 「収容患者異動表」『昭和十五年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1941 年、41 頁。
- 38) 上川豊「内台癩病観の異同」『社会事業の友』第 67 号、1934 年 6 月、13 頁。
- 39) 「沿革」『昭和十年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1936 年、4 頁。
- 40) 「お下賜の鶏を」『万寿果』第 2 巻第 2 号、1935 年 9 月、ページなし。
- 41) 片野真佐子『皇后の近代』講談社、2003 年、168 頁。
- 42) 『山桜』第 31 巻第 8 号、1950 年 8 月、19 頁。
- 43) 『山桜』第 33 巻第 10 号、1950 年 10 月、21 頁。
- 44) 有吉比登志、香川、大島療養所、昭一二、三三歳没、いぶき、22 頁。
- 45) 下立田蟬男、熊本、回春病院、明四〇生、アララギ、157 頁。
- 46) 田中真人、九州療養所、明四四生、アララギ、202 頁。

- 47) 田中光雄、回春病院、大六生、アララギ、204 頁。
- 48) 野副美登志、熊本、九州療養所、昭一三、三四歳没、アララギ、247 頁。
- 49) 藤田薫水、香川、大島療養所、明二五生、心の花、276 頁。

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)